

## 大学人に求められるもの，そしてそれに応えるために

その他のタイトル	Letter from the dean
著者	高橋 智幸
雑誌名	社会安全学研究 = Journal of societal safety sciences
巻	10
ページ	v-vi
発行年	2020-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00020160">http://hdl.handle.net/10112/00020160</a>

## 大学人に求められるもの、 そしてそれに答えるために

冒頭から私事で恐縮だが、私が大学に就職したのは1993年であるから、四半世紀前になる。その当時と現在を比べると、大学を取り巻く環境は大きく変化した。例えば、18歳人口の急速な減少や就職活動の長期化、国立大学の法人化、伝統的な学問の分類に捉われない学部の急増など、変化は多岐に渡る。それらの良し悪しをここで議論するつもりはないが、さまざまな変化に伴い、大学が社会から求められるものも自ずと多様になった。研究においては、応用研究の比重が増し、実用化や社会実装まで求められるようになった。教育においては、豊富な教養や高度な専門知識に加え、実践的な課題解決能力を養うカリキュラムが期待されてきている。また、社会貢献においては、専門分野に関する意見だけでなく、さまざまな社会的課題に対して助言を求められ、政策の決定プロセスにまで加わることも増えた。このような多様かつ高度な社会のニーズに応じていくため、我々は専門性を高めるだけでなく、専門性を広げていくことも必要となる。

学生の指導においても同様である。学生が持つ興味や関心は極めて多様だが、自分自身でそれを明確に理解し、他者へそれを明瞭に示すことができる学生は少数である。多くの学生は多様な知的好奇心を潜在的に有しながらも、それをどのように満たしたら良いかが分からず、助けも求められないでいる。それを汲み取り、適切な助言を与えることが大学人の重要な役割であろう。そして、そこで必要となるのは、直接的に答えを伝授することではなく、学生が自ら答えを見つけるための道案内である。当然、後者の方が難しく、より高度な指導力を必要とする。

このように大学の内外から我々へ求められるものは極めて多様であり、その傾向は今後も強くなるかもしれない。それらに答えていくためには、専門性を高めるだけでなく、知識や経験を広げていかななくてはならない。大学人の多くはもともと知的好奇心が強く、自らの知見を増やすことに貪欲であるため、そのモチベーションは高いはずである。問題は時間と労力を十分にかけてもらえるかであろう。締め切りや雑務に追われ、新たな知識を吸収して思索にふける余裕がなくては独創性の高い創造的な仕事をするのは困難である。傍から見たらぼうっとしていると思われるような時間が実は重要なのである。大学や学部は多くの優秀な人材を有するが、その人材が能力を発揮できていなければ本末転倒である。

四半世紀前の大学には時間的な余裕が今よりもあった。他者がぼうっとしていることをとやかく言うことや短期的な成果に一喜一憂することは少なかった。私は多くの大学に直接的または間接的に関わってきたが、他大学と比べて現在の関西大学社会安全学部は独創性の高い創造的な仕事に取り組める環境を提供できていると思っている。もちろん組織であるから、運営していくために必要な会議や

事務的作業は存在する。しかし、それらを補っても、知的欲求を満たすための時間と場を提供できず、それが本学部の現在の成功につながっていると考える。我々は学部創設10周年を経た今後もその状態を維持していかなければならない。それが学生や社会から求められるものへ答えることになり、関西大学社会安全学部のより一層の発展に繋がるはずであるから。

2020年2月

関西大学社会安全学部長・  
大学院社会安全研究科長  
高橋 智幸